

桜蔭俳話会 通信句会(第一一四回 平成二十六年夏)
高得点句 自句自解

十一點

⑤生きてゐるものに影あり原爆忌

増田 守

反語的に言えば、「死者には影がない」。生きている、生かされている「実体」があるからこそ、そこに影がある。原爆の多くの犠牲者の故に今日の生者がいる。

八點

今はなき書店の看板夏の果て

原田 清子

この夏、私は体調を崩し長い入院をしております。ベッドの上では俳句も思うようには出来ないものです。が、もしかしてこの環境の中だからこそ考えられることがあるのではと信じておりました。身近にあつた書店の文字を見つけたときは嬉しかった反面、淋しさを覚えた夏の終わりでした。

七點

再会の校舎の匂ひ大夕立

増田 守

小学校の創立記念の集会があつた。校舎に立ち入ったとき、そこは懐かしい匂いに満ちていた。ミニ同窓会のように懐旧談が交わされた。

六點

②雲の影お花畑を走りゆく

池田 弘子

花好きの友人に誘われ、長野の「高ボツチ高原」に行った時のこと。花を見て楽しんでた時、急に黒い雲が現れ、次々と横切つて行き、その雲の影がお花畑を生き物の様に駆け抜けて行くのを見て、(初めての光影に)おどろいた。

②足指のサンダルの跡夜の秋

佐渡谷 秀一

既に、異常気象とはいえぬ猛暑日が続き、うんざりさせられていたが、七月終りの或る夕方、ふと足の甲を見ると突つ掛けの鼻緒の跡が白く残っている。海へも行かず、外出さえ躊躇していたのにと吃驚した。いやいややっていた草むしりの際の日焼けしか思い浮かばない。今年も、蚊も少なかったのは幸いだつた。「足指」という表現は上手くないが、「過ぎ去つた夏の思い出」ということにしたい。

五点

② 千仏の黙みちてをり夏御堂

柏尾のり子

今年、何年ぶりかで、京都祇園祭りの山鉾巡行を見に行きました。三十五度を越える暑さに、汗まみれになりながら見物を終え、駅に向かう前に三十三間堂に寄りました。うす暗い御堂に入ったとたん、千体の千手観音が醸し出す静かな時間と空気につつまれ、身も心も生き返る思いでした。その時のことを俳句にしたものです。

① 一穴の蟻の迷宮蟻の尻

増田 守

地中に造られる蟻の複雑な巣を「迷宮」と捉えた。尻を立てて今まさに巢穴に入り込もうとする蟻の瞬間の姿を詠んだ。

① けだるさの一日始まる猛暑かな

小川名梅乃

今年の夏は稀にみる猛暑日の連続でした。朝から夏雲が強烈な太陽にまぶしく映えて、じっとしていても汗がにじみ出てまいりました。この一句を成した日も、朝から猛烈な暑さでした。今日もけだるい体を持ち歩くのかと、想像しただけでも余計に気怠さを感じました。

笹舟のはや点と化す晩夏光

佐渡谷 秀一

中学以来の友人夫妻が金婚とかで、仲間を誘い、京都鴨川の川床へ招待してくれた。川床は料亭「幾松」が催しているもので、ここは桂小五郎とその夫人となつた芸妓幾松の寓居跡。鯉中心の京料理は素晴しかった。へ金婚や幾松しのぶ納涼床。幾松は鴨川と高瀬川に挟まれている。高瀬川でも一句と思索するものの、復元の高瀬舟が一艘泊り、桜落葉が流れているばかり。この川は物資を運ぶ運河であつた。夏落葉は止め、笹舟はささやかな挨拶のつもりである。

ゆつたりと雷雨の中の百日紅

原田 清子

病院の前に珍しい花の色の百日紅が一本あるのですが、ある日の夜、烈しい雷雨が……翌日見に行つたのですが、いつもと変わりなくいつもの姿でゆつたりとしていてくれたことに安堵した次第でした。